

清朝末期における新小説の万華鏡

The Last Years of the Qing Dynasty :
A Kaleidoscope of Novels Written During that Period

顧 偉 良

Wei-Liang GU

はじめに

中国古代には、文言小説、筆記小説、白話小説といった小説のジャンルがある。古の神話から神仙伝へ、六朝時代の怪奇譚や唐の伝奇物語、および宋代の「説話」小説を経て、明代の四大小説（『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』）、そして清代の『儒林外史』、『聊斎志異』、『紅樓夢』に至るまで、その間、夥しい物語や小説の種類が誕生したのである。長い歴史の流れの中で、中国独自の古典小説のジャンルが形成されたといえよう。とはいえ、古代小説は詩文経書に比べて、どちらかという、軽視されたジャンルであった。文言小説は唐の伝記物語が現れることにより、漸く成熟したものが見られるが、白話小説は清代に至るまで軽視されたジャンルであった。ここには代表的なものしか挙げられていないが、それらは殆ど白話小説である。一方、筆記小説は、中国の伝統文学において文人独自の伝統を保っている。中国文学に於ける「雅」と「俗」の問題も、古代小説の中ではっきりと枝分かれしている。「詩以言志」、「文以載道」を重んずる中国伝統文学では、文学に於ける雅と俗の違いは、単なる形式的だけでなく、作者と読者層まで峻別している。

魯迅の『中国小説史略』の中では、古代小説の歴史の変遷に対する考察があり、清代の小説については、一、擬古物、二、諷刺物、三、風俗物、四、武俠物というふうに分けられている①。一方、清代末期には、近代小説の発生に於ける百花繚乱の時代が迎えられたのである。その間に発表された新小説は、中国国内の最初の統計では二千種類もの以上あるという②。後に日本では、樽本照雄編『新編清末民初小説目録』（清末小説研究会編、

一九九七年）が刊行され、それによると、清代末期、民国初頭（以下、「清末民初」と略称。）に発表された小説は、七千四百種類以上にのぼっているという。近年、文化史の方面で近代小説の発生に対する研究が進んで、特に大衆メディアの伝播と小説の関係についての研究は多様化を見せている。中国国内では、更に三千百以上の項目が加えられた上、『新編増補清末民初小説目録』（樽本照雄編、崑魯書社、二〇〇三年）が刊行された③。

中国小説史の研究者の間では、新文学運動が現れるに至るまでの二十年間（一八九七～一九一六）、清末民初に於ける新小説の発展は、三つの段階、第一段階（一八九七～一九〇六）、第二段階（一九〇七～一九一〇）、第三段階（一九一〇～一九一六）があると指摘されている④。実際、新聞小説の誕生はそれよりもっと前に現れており、本稿では特にその分類に拘泥する必要がないと思う。黎明期の新文学については別稿で論じるが、小稿では清末の新小説の誕生と新聞メディアの伝播との関係について考察したい。

一 上海最初の英字新聞

上海は、清代末期に最も注目すべき文化中心地であった。中国の近代小説の発生は、時代的背景にはその誕生の当初から、上海の都市文明、新聞メディア、翻訳媒体と密接な関係を結んだ。まず上海に誕生した早期の英字新聞について見てみよう。上海最初の英字新聞“North China Herald”（「北華捷報」、一八五〇年八月三日、発行者：ヘンリー・シェルマン [Henry Shearman]、毎週土曜刊行）が発行される。一八五六年三月二十二日、ヘンリー・シェルマンが死去。著作権が売られ、

“North China Herald”の編集を引き受けたイギリス人のチャールズ・スペンサー・キャンプトン(Charles Spencer Compton)は、五年間半(1856.5.17-1861.12.31)の間に新聞発行の拡大に努めた。一八五九年、“The Shipping News”(「毎日航運新聞紙」、日刊)を発行し、同年、“North China & Japan Market Report”(「北華与日本市場消息報」)を増刊する。後に“The Daily Shipping News and Market Report”(一八六一年、「毎日航運与商業新聞」と合併する。一八五九年三月十日、更に“Shanghai Chronicle(of fun fact and fiction)”(「上海真相」月刊)を発行する。一八六一年の末、キャンプトンは、上海最初の中国語新聞『上海新報』(“Chinese Shipping List and Advertisers”)の発行準備に着手する。一八六一年九月十五日、別の競争紙“The Shanghai Daily Times”(「上海毎日時報」天孫洋行発行。)が刊行される。一八六七年になると、上海では毎日に見られる英字新聞が数種類もあるが、その後、多数の英字新聞紙も誕生した。ここには代表的なものしか挙げられていないが、特に伝教師による宗教新聞の発行は、早くも一八一五年より行われていた(『中国近代新聞成立史1815-1874』を参照、卓南生著、ペリカン社、一九九〇年)。なお、上海で西洋人による中国語雑誌の発行は、『六合叢談』(一八五七年)があり、英文名は“Shanghai Serial”、「六合」とは『莊子』の書物から由来する名称で世界を意味するものである。総合的な雑誌で、西洋事情に関する翻訳が多く掲載され、一年後に停刊となった。

二 上海に於けるジャーナリズムの誕生

一八七二年四月三〇日、中国新聞史上で記念すべき上海最大の新聞紙『申報』(1872~1949)が誕生した。出資者はイギリスの商人、アーネスト・メジャー(Ernest Maier)とその友人の三人。ビジネスや商売人を相手に発行された『上海新報』(“Chinese Shipping List and Advertisers”)の経営方針に比べ、『申報』は中国人の編集長を起用し、民間人を重視して社会記事や広告などを増やす。『申報』が拡大されていくと同時に、同系列の出版事業も増やされていく。その結果、一八七二年十一月、月刊誌『瀛環瑣記』(一八七五年に『四

溟瑣記』、一八七六年に更に『環宇瑣記』と改名。一八七七年十一月、停刊。)が創刊され、中国最初の月刊文芸誌として、文人の詩作やエッセイ、遊記や翻訳など海外見聞も掲載された。最初に『申報』(一八七二年五月二十一日から五月二十四日)に連載されたのは、スフィートの『ガリバー旅行記』の断片(「小人国」)であった。そして、一八七三年、雑誌『瀛環瑣記』には、イギリスの小説『昕夕閑談』(フランス革命に関するこの物語は、中国最初の翻訳小説と言われている『椿姫』[林纾訳]よりも二十数年も早い)の訳文が掲載された。ただし、翻訳者の氏名も不明、原題書名の記載も一切なしで、「蠡勺居士」と署名しただけであった。『瀛環瑣記』創刊号に「〈瀛環瑣記〉叙」(上海蠡勺居士作)と署名された文章が掲載され、同一人物の可能性が高いと思われる。この謎の人物はずっと正体不明のままだったが、『晚清小説理論』(顔廷亮著、中華書局、一九九六年)に収録された論文「蠡勺居士及其小説理論」によれば、蠡勺居士と署名した本人の氏名は、即ち「蔣子讓」であるという。かれは杭州の人、孝廉の士として県知事を務めたこともあるし、日本にも行ったことがある。著書や翻訳書は多数ある(『長崎島紀行』など)。

「蠡勺居士及其小説理論」では、雑誌『瀛環瑣記』の主筆も、即ち蔣子讓だろうと推定されている。白話文で翻訳された『昕夕閑談』は、一八七三年から一八七五年にかけて『瀛環瑣記』(3期~28期)に連載され、西洋の小説として初めて中国に翻訳され、その意義は大きかった。また同じ雑誌に寺門靜軒『江戸繁昌記』の訳文も掲載され、日本の文化的事象が紹介された。雑誌『瀛環瑣記』の刊行目的は、新聞を蔑視する、創作意欲のある文人たちを引き付け、彼らのために発表の場を提供することにあつたのである。こうして、中国最初の文芸誌として、初めて文人とメディア言説との関係が結ばれた。一八七六年三月、中国で最初の白話文新聞『民報』(The Minpao Magazine, 商務印書館)が発行され、数号刊行の後、停刊。一八七六年五月、中国近代画報として最初の『環瀛画図』(後に『環瀛画報』と改称。)が刊行された。一八八四年五月、更に中国最初の旬報『点石斎画報』(The Illustrated Lithographer)も発行、

一八九八年八月停刊。『点石齋画報』が発行された十五年の間に、清末の政治、社会、文化の状況に関する様々なニュースが掲載され、明治維新後の文明開化の事象、および日本の習俗などに関しても図像で多数紹介された⑤。

ところで、上海で中国人自身による新聞発行は、『西国近事』（江南製造局、一八七三年四月）であり、これは西洋諸国のニュースなどを中心とした翻訳新聞である。アヘン戦争後、「富国強兵」の政策を進める清政府は、一八六七年、上海に兵器や軍艦を製造する江南製造局を作り、一八六八年六月、同製造局内に翻訳館を増設する。『西国近事』は、読者層が限られ、最初は清政府の閣僚や高官でしか読むことができず、後に一般民衆にも開放となる。当時、内部新聞として士大夫階級の梁啓超や康有為の維新志士らに大きな影響を与えたのも注目すべきことである。アヘン戦争後の半世紀の間に、上海での新聞紙の発行がかつてないほど盛況であった。それに対し、その頃の清政府足元の北京では、教会の伝教師により発行された数種類の宗教新聞の以外に、他の新聞はまだなかった。日清戦争後、社会的危機感が高まる中で、梁啓超、康有為等による上書運動（一八九五年）が行われ、同年八月十七日、康有為の出资により『万国公報』が刊行され、富国、救民新法など鼓吹される。しかし、資金難により短命の『万国公報』は、三ヶ月しか続かず、合わせて四十五号刊行された。北京を去った康有為は、幕僚の張之洞等の協力で、上海で〈上海強学会〉を作り、一八九六年一月十二日、『強学報』を発行する。だが、十四日間も経たないうちに、政見をめぐる内部意見の違いで二号の刊行だけで停刊となる。『強学報』の停刊後、北京で新聞発行の挫折を味わわれた梁啓超は上海にやって来て、黄遵憲（日本駐在の中国公使を務めていた。）等との協同で、一八九六年八月九日、『時務報』（The Chinese Progress, 1896.8-1898.10、上海時務報館）を発行した。梁啓超は主筆を担当する。主な資金源は黄遵憲の出资によるもの。この新聞の特色は、意気投合の「同人報」とも言われている。専ら社会的事件の報道を中心とした他の新聞とは違って、『時務報』は、世界情勢や中国情勢に対する各国の論評を重視して報道した。たとえば、「東方時勢」、「日本

国勢論」、「アメリカ商務論」、「上海商務事情論」などが掲載された。最初は英語の記事だけ訳したが、その後、フランス語、日本語、ロシア語、スペイン語などの記事も訳される。当時の上海では、これほど世界情勢に関する熱心な報道は他になかった。『時務報』の毎号には、必ず一、二篇の政論が掲載され、他にも「域外報訳」、「西文報訳」、「東文報訳」、「仏文報訳」等の欄が設けられた。梁啓超は、殆ど毎号の巻頭論文に維新变法に関する論説を発表した。例えば、『变法通議』は、一年三ヶ月の間、前後二十一号にわたり掲載された。更に世界情勢以外の伝記物、例えば『ワシントン自伝』やシャーロック・ホームズの探偵物語なども『時務報』に掲載された。

一八九六年から一八九八年にかけて上海で発行された新聞の数と種類は、当時の中国全土の総数をも超えている。内容は政論、新学（西洋の学問）を中心としたものが多い。『強学報』、『時務報』、『新学報』等は、政治に関する变法を鼓吹する論説が多く、古い八股文体に反対して誇張表現の多い梁啓超の独特な文体は、当時、「時務文体」とも呼ばれた。新聞媒体の中で新しい文体が生まれるのが正に時代の趨勢であった。その他に、『時務日報』、『中外日報』、『演義白話報』等の新聞は、社会的時事を中心とした報道が多く、『実学報』、『求事報』、『算学報』、『農学報』、『格致新報』等の新聞は、自然科学を中心としたものが多く、また『無錫白話報』、『蒙学報』、『女学報』などは、啓蒙的知識を中心としたものが多い。例えば、梁啓超は、通俗新聞『蒙学報』『演義報』刊行の際に書かれた「序言」の中で、「西洋諸国の教科書は、遊戯小説に基づくものが多く、日本の变法も俗謡や小説の力に頼っている。故に童子を悦ばせ、愚昧を指導するのは、之に越したことがなかった。他国が然りならば、わが支那の民も然るべし。識字できない者は十人の中に六人もいる、たとえ識字しただけで文法も分からない者は、更に四分の三になっている！ 学問を愚民に教えることは、誠に今日の中国を救う第一義となっている！」⑥と語っている。その頃の中国社会では、小説は啓蒙の力を持つことに対して既に重要視されるようになった。例えば、トマス・ハックレーの『進化と倫理』など西洋の思想を翻訳した有名な翻訳家

の厳復は、一八九七年、天津で創刊した『国聞報』の「本館附印説部縁起」の中で欧米や日本の例を上げ、「欧米、東瀛（引用注：日本）は、彼等文明開化の時、往々小説の力を借りていた。」⑦と触れている。このように、小説は文明開化の時代の中で注目の的となったのである。

『中国近代小報史』によると、上海の小新聞に掲載された最初の小説は、『野叟曝言』（『滬報』、一八八二年五月創刊）であるという⑧。地元の小新聞『滬報』に刊行された際に、『第一奇書野叟曝言』と題する目録で印刷された。章回体の小説、全部で二〇巻（刊行実態は不明）である。ところで、上海で小説の定期刊物として最初に現れたのは、一八九二年に発行された『海上奇書』（半月刊、後に月刊となる）であると言われている。『申報』の主筆、韓邦慶が創刊。彼の連載小説『海上花列伝』は、清末に現れた最初の近代的小説である。内容は上海の花柳街を舞台に赤裸々と描かれた一種の暴露小説であり、伝統的な才子佳人の愛情小説とはまた違う種類の世俗化の写実性を持っている。一方、前述の新聞内容とは違って、休閒的な性格を持つ小新聞も登場してきた。最も有名なのは、『遊戯報』（日刊、一八九七年八月二四日～一九〇八年七月二四日、発行者：李宝嘉）の創刊であった。

『遊戯報』は、清末に於ける「休閒小報」の開祖といってもいい。『遊戯報』の刊行は大成功を取めた後、更に一般市民の好奇心を注ぐため、日常生活や趣味を中心とした記事報道の欄も拡大されていく。上海を舞台に酒家、クラブ、妓女などといった写實的、露悪的、庶民的娯楽を中心とした内容が多かった。『遊戯報』の誕生は、メディアを中心とした近代商業都市の上海と密接なつながりを持っていた。李宝嘉、別名李伯元、彼は江南地方から上海にやって来て、初めに『指南報』（日刊）を発行した。最初は社会的事件を取材して報道する程度だったが、半年後、文芸作品も掲載するようになる。記事の報道と文芸作品とが混合した版面で登場した。当時、『遊戯報』の影響下で、似通った内容の新聞も次々と発行された。例えば、『笑報』（一八九七年十月二〇日）、『消閑報』（一八九七年十一月二四日）、『海上奇聞報』（同時に『青樓報』も発行）や『趣報』、『采風報』、『通俗報』などといった内容的低俗の新聞が現れた。こ

れらの編集方針は、消閑にある。『采風報』（一八九八年五月）の主筆孫家振は、自ら執筆した遊戯文章を新聞に掲載し、彼の創作した小説『海上繁華夢』を『采風報』に連載した（毎回2ページ）。この小説は上海の都市生活を舞台に創作されたものである。このように、上海で発行された小報（小新聞）は、中国近代の通俗文学の発展に寄与することが多く、作品発表の場を提供する他に、メディアの言説を担う一面も果たしたのである。上海は、中国のどこよりも時代の最先端を歩んだメディアを中心とした商業都市が現れてきた。

以上を見るに、清末期に現れた最初の小説は、決して伝統的な文人の書齋から生まれるものではなく、翻訳媒体と新聞メディアの伝播との密接なつながりを持ったことが分かるだろう。その中で小説の社会化、世俗化の視覚が拡大されていくのであった。小説発表の実体は、正に各種の小新聞、および雑誌であった。かくして清末の小説は、一種の消費文化の言説として、一般市民の生活レベルに登場してきたわけである。だが、その時点で小説は既に成熟したメディアの言説であると見るのはまだ早計である。小説がメディアの言説として注目されたのは、日清戦争以降だった。

三 梁啓超と『新小説』

清末の中国知識人に衝撃を与えたのは、日清戦争（一八九四～一八九五）であった。日清戦争後、深刻な危機感を覚えた梁啓超は、康有為（1858-1927）、譚嗣同（1865-1898）等と共に、一八九五年、光緒帝に政治制度の改革を求める上書運動を行った。一八九八年（戊戌の年）、光緒帝による変法の詔書が出されたが、百日間経たものの、同年九月二一日、西太后を中心とした保守派のクーデターにより「戊戌変法」（「百日維新」とも呼ぶ。）が失敗に終わった。梁啓超と康有為は、余儀無く日本へ亡命。一方、亡命を拒否した譚嗣同は、北京の繁華街で公開処刑され、弱冠36歳であった。梁啓超は亡命先の日本で、華僑の友人から政治小説『佳人之奇遇』を紹介され、政治小説の社会的、政治的役割を知るに至った。そして、横浜で華僑から資金を得て『清議報』（一八九八年十二月二三日）を発行した。第一冊に梁啓超による『佳人

之奇遇』訳文の連載が始まる。連載の間、梁啓超は翻訳と日本語勉強を同時進行したが、訳文は好評だったという。梁啓超の日本語教師を務めた同胞の羅普との共著『和文漢読法』（一九〇一年）も刊行された。ここで、任公と署名した梁啓超の論説「訳印政治小説序」（一八九八年）の言葉を見てみよう。

昔、欧州各国の変革の始、その大儒碩学、仁人志士は、往々その身の経歴、および胸中に抱く政治の議論を小説に寄せた。それで、その地の勉学する青年は、学校の暇に、それを手にし、それを口にし、下は兵士、商人、農民、職工、車夫馬丁、婦人子供まで、それを手にし、口にしないものはなく、往々一書が出版されると全国の議論はそれによって一変した。かの米、英、独、仏、澳、伊、日本の各国政界の日に進歩するのは、政治小説の功が最も大きいとされる。英国の某名士は言った、小説は国民の魂であると、誠にそのとおりである。⑨

そして、「飲氷室自由書（一則）」の中でもこう述べている。

日本の維新運動の成功は、小説が主な役割を果たした。明治十五、六年間、民権自由思想の聲が国中に溢れ上がった。西洋小説の中でフランス革命やローマに関する物語は次々と翻訳された。また『自由』、『自由燈』の書名が沢山現れてきた。翻訳も盛んになり、政治小説の著述も多く出回った。例えば、柴東海の『佳人之奇遇』、末広鉄腸の『雪中梅』、藤田鳴鶴の『文明東漸史』、矢野龍溪の『経国美談』（矢野氏は今、中国公使を務め、日本文学界の泰斗、進歩党の名士でもある）など。最も影響力があったのは、『経国美談』と『佳人之奇遇』の二作であった。⑩

上記の二つの文章では、小説の啓蒙性と社会的効用が強調されているが、梁啓超の考えは、実は彼の師である康有為に基づいている。康有為は、日清戦争の前にも日本の教育事情に注目して、当時日本で編纂された教科書の書目を集め、『日本書目志』（大同訳書局、一八九八年）を編纂した。

その中で康有為は、特に幼学教育の重要性を訴えていた。その影響を受けた梁啓超は、後に『変法通儀』の中で条項を立てて変法の重要性について論じ、「学校総論」の条項では幼学教育や女学教育などについて触れている（『飲氷室合集』第1巻、中華書局、二〇〇三年）。政治家としての梁啓超は、『日本書目志』、『日本維新変政考』などを持つ康有為の思想にかなりの影響を受けていたと推察される。『清議報』刊行後、引き続き華僑から資金を得た梁啓超は、一九〇二年十一月十四日、更に『新小説』（新小説報社、一九〇五年停刊）を横浜（山の下町52番）で創刊した。巻頭論文「小説と政治との関係について」の中で、梁啓超は小説の人間社会を支配する力についてこう述べている。

一国の国民を一新するには、まずその国の小説の革新が必要である。だから道徳を革新しようとするには小説の革新が、宗教を革新しようとするには小説の革新が、政治を革新しようとするには小説の革新が、風俗を革新しようとするには小説の革新が、学芸を革新しようとするには小説の革新が必要である。そして人心を革新しようとするにも、小説の革新が必要である。〔…〕わが中国人の状元宰相の思想はどこから来ているだろうか？それは小説からである。わが中国人の佳人才子の思想はどこから来ているだろうか？それは小説からである。わが中国人の江湖盜賊の思想はどこから来ているだろうか？それは小説からである。わが中国人の妖巫狐鬼の思想はどこから来ているだろうか？それは小説からである。〔…〕百数十種の小説の力が、直接間接に人を毒していることは、これほどまでにひどいものである——たとえ好んで小説を読まないとしても、これらの小説がもう社会にしみこんでいて、そんな風潮ができていなのだから、生れないうちから、もうその遺伝をうけてくるわけだし、この世に生れ出ると、またそれに感染されるので、知恵のある賢い人間でも、自分でそれから抜け出すことはできないわけだ、だから間接というものである。〔…〕ああ、いつまでもこのような状態にしておいたら、わが国の将来がどうなるか問うまでもない。だから今日、政治を改良しようとするならば、

必ず小説界の革命からはじめねばならず、国民を一新しようとするならば、必ず小説から着手せねばならないのである。⑪

この文のなかで、梁啓超は更に小説の感染力について四種類ものを挙げている。すなわち、一、薰(薰染)、二、浸(浸潤)、三、刺(刺激)、四、提(同化)である。それに基づいて、中国の政治腐敗の根元、才子佳人の思想、および妖巫狐鬼などの信仰は、すべてそれらの感染力から来していると断定し、しかもそれらの信仰の害毒は古典小説『紅樓夢』や『水滸伝』などにあると断罪した。中国文学批評史において、これほど古典小説に対する否定は、これまでに見られなかった。だが、そのような断罪は、逆に小説の感染力を否定できない一面も浮き彫りにし、したがって梁啓超により提起された小説の感染力がどこまで中国古典小説への否定につながるかは別問題であろう。実際、二十世紀初頭に政治小説の社会的効用を持ち上げたのも梁啓超であった。彼の論理は、いわば自己撞着が露呈したといえよう。中国古典小説に対する梁啓超の否定説が適切でないのは明白であり、近年、中国国内の研究者の間でも様々な批判説が出ている⑫。だが、古典小説に対する梁啓超の否定説が現れたこと自体は、注目すべきものである。これについては、梁啓超と政治小説との関係について考えてみたい。

梁啓超は、『新小説』第一号に「政治小説は、即ち著者自身の抱く政治思想を吐露すること。その立論は中国の枠組みにあり、事実はすべて空想に由る。」(一九〇二年十一月)と述べている。そして、『新小説』第一号には、梁啓超の政治小説『新中国未来記』(五回連載、未完作)が掲載される。この小説は、見方によっては歴史的想像の物語、或いはカタルシスの物語とみることもできる。孔子生誕後の二千四百十三年、即ち一九六二年の正月一日、南京で維新五〇周年の集会が開かれた際、全国教育会会長、文学博士孔覚民の講演「中国近代六十年史」が行われる。講演の内容は、六十年前の一九〇三年まで遡って、その年に旅順旅行へ出かける二人の維新志士に関する旅物語である。その中で、維新志士の政治的議論を踏まえながら、封建的専制への批判、維新変法、君主立憲の主張、

ないし帝政ロシアによる旅順の植民地支配の摘発などに触れられている。物語の時間は、一九〇三年から一九六二年までの六十年間であり、語り手の叙述は時間的逆戻りとなっている。この小説に見られる時間的逆戻りの叙述法は、1894年、上海広学会より刊行された『百年一覚』(Edward Brllamy, "Looking Backward, 2000-1887")という書物から影響を受けていた。この本は、当時、中国滞在のイギリス人の宣教師、ティモシー・リチャード(Timothy Richard、中国名:李提摩太)により翻訳され、その書名も梁啓超の『西学書目表』に見られる。因みに、明治七年に発表された西周の『百一新論』、或いは講義録をまとめた『百学連環』は、西洋の「百学」の「連環」という思想に基づいて講じられている。日本亡命中の梁啓超が西周の『百一新論』や『百学連環』を実際読んだことがあるかは不明だが、注目すべきことでもある。

『新中国未来記』における時間的逆戻りの叙述法は、中国の古典小説にも見られなく、ほかにも見られない新しい発想であろう。そして、『未来記』のなかで殆ど梁啓超の分身と思われる人物が語り手として登場し、中では新小説の言説は、政治的議論を彷彿とさせる箇所も多く見られる。この小説に注目すべき点は、時間の構成と語り手の叙述である。そのような設定は、梁啓超の求めようとする新小説の境地に基づいたものと思われる。『新中国未来記』の体裁は白話小説の章回体であるのに対し、政治小説的な語りを借りて登場人物による自分の政治的見解を述べる方法は、直接、日本の政治小説から直輸入したものである。言い換えれば、新小説の境地、古い小説の体裁は、この作品の内容と形式である。『新中国未来記』は政治小説として、確かに当時に現れた一種の新しい小説の形式であり、理想小説でもあるといえよう。

中国国内の研究者では、梁啓超と日本の政治小説の関係について次のように指摘されている。訳文の正確さを伝えるため、ここに原文を掲載する。

《明治年间小说观念的逐步转变过程，在梁启超身上也重演了一遍。以政治小说为中介，梁启超最终获得了与日本文学界大致相同的认识。〔…〕梁启超把“政治小说”引进中国，导致了

传统小説観念の崩壊、建立全新的小説観念因而具有了无限的可能性。应该说，“小説界革命”真正的革命意义正在这里。当然，这一说法并不意味着“小説界革命”已彻底完成了小説観念的转换。》

《明治年間における小説観念の変化過程は、梁啓超に於いても見られる。政治小説を媒介して、梁啓超は最終的には日本文学界と同様な認識を得られたのだった。〔…〕梁啓超により「政治小説」が中国に導入されたことで、伝統小説の観念が崩壊し始め、全く新しい小説の観念を確立するために無限の可能性を提供してくれた。一 “小説界の革命”の本当の意義はそこにある。勿論、それは、「小説界の革命」により小説の観念を徹底的に轉換させたと意味するものではない。》¹³（筆者訳）

この文の指摘は、明治の小説観念の変化と梁啓超の認識についてやや不明瞭な点があるので、誤解を生む可能性がある。つまり、著者の言う「政治小説」とは、全く新しい小説の観念として理解されるということである。この理解に従えば、梁啓超による政治小説の導入で、伝統小説の観念の崩壊につながるわけである。確かに政治小説が中国に一定の社会的影響を及ぼしたことは事実であるが、果たしてそれが伝統小説の観念の崩壊につながったかは複雑な問題も絡んで疑問が残っている。「政治小説」に関して、どのように理解すればいいのか。ここでは、日本の政治小説と小説の観念について若干検討する必要がある。

中村光夫の『明治文学史』（筑摩書房、昭和44年）の中で、日本の政治小説について次のように述べている。

おそらく、当時の民権運動の性格からきている点もありますが、政治小説は、文学としてはこれまであった古いものによせあつめであり、よせあつめにすぎなかったために、継続的な発展をするだけの生命力を持ち得ませんでした。それでも古い要素の組合せからおのずから新しいものが生まれた点もあるので、啓蒙思想が戯作や人情本の形で述べられるということは、それが一部の学者の頭のなかだけでなく、国民の

感情に浸透しかけていることを意味しますし、戯文を喜んでいた学生たちが、西洋の政治家の伝記や、国家の興亡史に興味を持つようになれば、彼等の関心は新社会にたいしてより積極的になったわけであり、文学が彼等の生活の他の面とさらに密接に結ばれたこととなります。「自由」といい、「平等」「独立」というような封建的な社会関係打破に用いられた理念が、たんに政治的な観念でなく、人間生活の全般にかかわりを持つ以上、当時の自由民権の運動は、たんなる政治運動以上の、深い時代の動きの象徴であったので、政治運動と政治小説はこの同じ幹から出た二つの枝ということが云えます。〔…〕政治小説に、その後の日本の小説の実現し得なかったさまざまな可能性を見ることは明治文学の性格に新しい光を投げる試みとして注目すべきです〔…〕（『明治文学史』70～79ページ）

中村光夫氏の指摘に注目すべきところは、政治小説は、新しい小説の観念として捉えるよりも、文学として継続的に発展するだけの生命力をまだ持ち得なかったという点である。日本の政治小説の分類は、必ずしも定説があるとはいえない。柳田泉氏の名著『政治小説研究』（上・中・下、春秋社、昭和43年）では、狭義の政治小説の視点で稗史小説などは非政治小説として分類されているが、一方、山本良氏は著書『小説の維新史——小説はいかに明治維新を生き延びたか——』（風馬書房、二〇〇五年）の中で、例えば嘉永二（1849）年に刊行された『海外新話』（嶺田楓江著、私家版）まで遡って、それを政治的想像の物語として政治小説と見ているのである。こうも理解してよからうが、柳田泉氏は、やや狭義の政治小説として捉えているのに対して、山本良氏は、ミクロ・ポリティクスとしての〈政治〉小説の視点から政治小説を考えている。

『佳人之奇遇』などに見られるように、日本の政治小説は、必ずしも政治改良や国民啓蒙といった政治的観念を以って登場したわけでもないようである。実際、国民国家の建設を目指す明治という時代の中で、政治小説に限らず、あらゆる方面の言説が形成されていくのである。確かに明治初

期の段階では政治小説は、啓蒙的な言説としての役割を果たす一面もあったが、それ以降、様々な観念小説、例えば、家庭小説や社会小説などといった種類のもので生まれてくるのである。未来を空想する、或いは新世紀の到来を予測する探偵小説や科学小説などと同様、政治小説が登場したのは、ある意味では文明開化に於いて時代の趨勢であろう。亡命先の日本で梁啓超と日本の「政治小説」との出会いは、小説の伝播力を考えると、歴史的想像の物語としての〈語り〉を学んだと位置づけるべきものであろう。その頃の清国では、まだ政治小説も誕生せず、小説を娯楽中心とした時代では、梁啓超の知り得た「政治小説」の言説が「自由」とか「平等」とかいう風に、清国の庶民生活のレベルでどこまで認識されたかどうかは疑問にも思われる。従って、全く新しい小説の観念として日本の政治小説に求められたものとはすぐに考えにくい。物語と〈語る〉主体との関係で日本の政治小説に対する理解は、政治小説を、必ずしも自由民権運動に生まれた一種の言説として捉える必要がなく、物語や〈語る〉主体の視点からも見る必要性が迫られていると思う。

梁啓超と政治小説の関係において、特に政治小説に関して注目すべき新説の提起は見られないが、かれによる「小説界の革命」説^⑬の提起が小説界に及ぼした影響は否定できない。これは小説改革に対して初めて出されたテーゼである。その趣旨は、小説の役割が政治を改良し、国民を啓蒙させ、社会的現実を反映しなければならないということである。伝統文学のなかで小説の地位は、詩文より比べ物にならぬ程低かったのに対し、梁啓超により、新しい時代の中で確かに新小説の地位を高めた積極的な意義があった。それと同時に、小説の政治的効用を鼓吹して、それを以って国民を啓蒙しようとする伝統文人としてのもう一面も窺われるだろう。そもそも清末に最初に現れた新小説は、そのような政治的言説や国民の啓蒙とは無関係で、全く新聞メディアの中から生まれたものである。清末に於ける新小説の変容は、何よりも近代上海における新聞メディアの伝播で捉えるべきものではないかと思われる。

四 清末の新小説

一九〇二年、横浜で創刊された『新小説』は、一卷(全12号)だけ発行された。『新小説』の第一号は、「中国唯一の文学報(新小説)」の出だして刊行され、「政治小説」、「社会小説」、「歴史小説」、「翻訳小説」、「科学小説」の欄も設けられた。その後、『新小説』第一巻第七号から〈小説叢話〉の欄が増設され、文学上の小説の価値、小説の社会的効用、および西洋諸国の小説進化の歴史や小説家の道徳などに関する論説が掲載された。一九〇五年一月、『新小説』の版元が上海の広智書局に移られ、第二巻(全12号)より刊行される。上海に移られた『新小説』の編集方針は、既に政治小説の論調に愛想を尽かし、小説の政治的効用にもあまり興味を示さなかったのである。この期に翻訳小説も多数刊行され、読者の好奇心を注ぐ探偵物や刺客などといった内容が多かった。後に現れる新文学運動の主唱者の一人、陳独秀の論文も掲載された。一方、政治小説の効用や維新変法に関する論説を掲載した『清議報』は、刊行三年後の一九〇一年十二月、停刊となった。二ヵ月後、更に『新民叢報』(Sein Min Choong Bou, 一九〇二～一九三〇)が発行される。そこに連載された梁啓超の『新民説』は、大きな反響を呼んだ。大衆的メディアの効果が達成したこの新聞は、中国国内で大反響を呼び、発行部数は一万部にのぼったという。

ところで、一八九八年九月、西太后を中心とした保守派によるクーデターの直後、全国規模で新聞雑誌の発行に対する禁令が出され、上海で発行される数十種類の新聞は、半分以下に発禁され、他の地方での新聞発行に対してはもっと厳しかった。娯楽中心だった『遊戯報』や『采風報』は、幸いにも発禁から逃れ、生き残れたのである。そのおかげで『采風報』の主筆が、梁啓超の『戊戌政変記』、また横浜で刊行された『清議報』や『新民叢報』を上海で代理販売もした。一九〇〇年以降、上海の「海派小報」は再び繁栄の時代を迎える。一九〇〇年に日本東亜同文会発行の『同文消閑報』、翌年に『世界繁華報』が刊行される。『世界繁華報』の前身は、即ち『遊戯報』だった。一九〇一年、更に数種類の新聞『寓言報』、『奇新報』、

『笑林報』、『博覧報』、『春江風月報』、『及時行樂報』、『支那小報』、『蘇州白語報』などといった名目色々なものが発行された。その中で特に注目すべきなのは、李宝嘉が新発行した『世界繁華報』である。この新聞に李宝嘉の諷刺小説『官場現形記』が連載され、現実社会を題材とした小説の創作は、梁啓超が日本で創刊した『新小説』よりも早かった。以前の新聞内容は、殆どナマのニュースとして報道されたが、『世界繁華報』は、社会的記事に対して諷刺的な内容を加え、読者層を拡大していく。その頃の上海では、梁啓超の政治小説『新中国未来記』などが発表され、小説を専門的刊行物としたそれらの手法は注目されるようになる。上海では十日間に一冊の小説が出るという定期刊行物、『上海小説』も現れてきた。それ以降、上海では新聞小説の時代が迎えられるようになる。『官場現形記』は、諷刺小説として世に現れると、その種類の小説が上海でも大流行になった。因みに、李宝嘉の小説『官場現形記』は、清代前期の小説『儒林外史』の延長上にあると見ていい。『儒林外史』は、清代小説の中で、いわば勸善懲惡的な小説の開祖である。ここで、この小説について過去に行われた評価を見てみよう。

中国の小説は、『儒林外史』が現れる前には社会的描写が少なく、内容は殆どお坊ちゃんの落ちこぼれや乞食に転落するお嬢様の有様、または喜劇的なハッピーエンドである。基本的には言葉の遊びに過ぎず、文学的価値は全く無いのである。晋や唐に諷刺小説の形がで上がり、明代にはその繁栄が見られたが、それらの物語は人情に通ぜず、現実から逃避した。ただ「冗語」を言っただけで、諷刺とは言えない。だが、吳敬梓(引用注：『儒林外史』の作者)だけは違う。彼は慧眼を持って、文芸の功利性を知っている。その筆で麻痺した民衆に向かって、これ以上愚昧になってはいけない、侮辱された者や被害を蒙られた者が立ち上がるべきだと、警告したのである。^⑮

『官場現形記』の他に、李宝嘉は更に政治小説『文明小史』や『活地獄』がある。『文明小史』(商務印書館、一九〇三年、約四〇万字)は、政治

小説風で清末の時代変動ぶりを描き、当時の人気を博した世情小説でもあった。この小説は、一九〇〇年以降の中国社会に入ってきた文明開化の事象を取り上げ、作品には複数の人物が登場し、人物描写も固定されず、流動的な時間が流れている。更に登場人物の名前には、賈子猷(エセ自由)、賈平泉(エセ平権)、賈葛民(エセ革命)という風に、登場人物の名前を揶揄して文明開化の息吹が吹き込まれている。また日本留学をした人物が弁髪を切った話も描かれている。『文明小史』が単行本として刊行された際に作者の名前が記載されなかった。その他にも『醒世縁』、『経国この美談』といった小説が上海に現れたが、殆ど政治小説的な手法が書かれ、小説としては、あまり新味が見られない。

魯迅の『中国小説史略』の中で清末の小説について次のように述べられている。

光緒(引用注：正しくは「光緒」)庚子(一九〇〇)以後、糾弾と摘発の小説の最盛期を迎えた。というのは、嘉慶以来、しばしば内乱(白蓮教、太平天国、捻軍、回教徒)を平定したけれども、外敵(イギリス、フランス、日本)にもしばしば敗北させられて、しがたない民衆は、蒙昧のため、茶をすすりながら、反乱平定の武勲の話に聴き入り、有識者は、急遽、改革を考えて、敵愾心にたよって、維新と愛国を呼びかけたが、「富国強兵」にとりわけ関心を寄せた。

戊戌政変は不成功であったので、二年後、すなわち庚子の年に、義和団の事変が起こった。民衆は、政府が平和維持の能力を欠くことに気がついて、攻撃を加える意図を持つようになった。小説におけるその傾向は、隠されていることを摘発し、弊害を暴露し、当時の政治をきびしく糾弾し、ある時は、さらに拡大して習俗までも罵倒した。それは世の中を匡正することが狙いであり、諷刺小説と同類に見えるけれども、批判が浅薄で、内に秘めた鋭さがなく、あまりにも誇張した表現をとって時の人々の好みにあわせさえしたから、その含蓄と技巧の隔たりは大きかった。だから区別するために糾弾と摘発の小説ということにする。その代表的な作者は、南亭亭長と我仏山人とであった。

南亭亭長は、李宝嘉のことである。字を伯元といい、江蘇省武進の人であった。若いときから制芸と詩賦に才能を発揮し、第一番で秀才に合格し、何回か郷試を受けたが、及第しなかったため、上海へ赴いて、『指南報』を創刊したが、まもなくこれを止めて、別に『遊戯報』を経営し、滑稽と嘲罵の文章を執筆した。のち、この新聞の「営業権」を商人に売り、さらに別に『海上繁華報』を経営し芸妓や役者の動静を報道し、詩、詞や小説を掲載して、非常に人気があった。⑩

光緒庚子（一九〇〇年）とは、義和団事件を指す。実際、この事件に刺激されて李宝嘉が書いた最初の小説は、義和団事件を題材とした『庚子國変彈詞』（一九〇一年）であった。魯迅も李宝嘉の糾弾小説や摘発小説を肯定的に捉えていた。当時、この事件を題材に書かれた小説も多数現れた。

『新小説』刊行後、上海では『繡像小説』（一九〇三年）、『月月小説』（一九〇六年）、『小説林』（一九〇七年）が相次いで現れ、清代末期の四大小説雑誌と呼ばれた。一九〇三年、李宝嘉が編集長を務める小説の定期刊行物として、半月刊『繡像小説』（商務印書館）は上海で創刊、一九〇六年四月停刊。前後合わせて72期刊行された。小説の定期刊行物として『繡像小説』は、比較的まとめた雑誌であった。上海で小説の定期刊行物として三番目に刊行されたのは、『新新小説』（一九〇四年九月十日月刊、開明書店、編集者：陳景韓、別号は陳冷血）であった。イギリスやフランスの戦争物語など多く翻訳され、内容は戦争小説、社会小説など（『虚無党』、『虚無党奇話』、『俠客談義』）に亘っている。彼の訳文は、当時、「冷血文体」とも呼ばれていた。武俠物も掲載されたが、一九〇四年から〇七年の三年間に、僅か10期しか刊行されなかった。

『月月小説』（群学社、編集者：呉沃堯等）は、一九〇六年九月、上海で創刊、一九〇八年十二月停刊。編集者の呉沃堯は、清末小説のなかで、初めて小説の娯楽・趣味説を提起した人であった。彼の「『月月小説』序」の中で、「小説の趣味、情感は、德育の一助になる。」⑪と述べ、専ら小説の政治的効用を主張する梁啓超を暗に批判している。その編集方針のもとで、『月月小説』は、探偵小説

や滑稽小説や愛情小説が多く掲載され、更には筆記小説の文体から独立した白話の短編小説が初めて世に出されていた。呉沃堯には、一人称の自伝的小説『二十年目睹之怪現狀』があり、当時において注目された。『月月小説』に次いで、一九〇七年一月、『小説林』（小説林社、編集者：曾樸、黄人）は、上海で創刊、一九〇八年九月停刊。この雑誌の編集者は、小説の審美的情趣を重視し、中国の古い小説に於ける人物描写の硬直化に対して不満をもって、西洋の小説美学を取り入れ、小説と社会の関係を捉え直した。フランスの小説は多く翻訳された。編集者の曾樸には諷刺小説『孽梅花』がある。政治小説風な描写もあるが、魯迅はこの小説の手法に対して一定の評価を下した。

ここで、『小説林』創刊の際に編集者の黄人が発表した「小説林発刊詞」を見てみよう。

今の時代は、文明交通の時代であり、また小説の交通時代でもある。わが国の国民自治もまだ予備段階にあり、教育の改良も未だに普及の段階に達していない。科学はまるで骨董の如く真偽の分別がない。実業はまるで酔っ払いを助けるように、難儀してまだ自立していない。ここに小説が現れるのは理の当然であろう。内外の文豪は、専ら衣食住を考える方針を変えようとしている。みなそれぞれ自分の知恵を絞って、筆を駆使して世界情勢を記録し、或いは筆鋒を変えて自国の現状を写す。[……]新聞紙の広告欄の中から新しい勢力が現れ出るのは、即ち小説である。[……]社会に於ける小説の流行は斯くの如くである。[……]文明形式の模倣、自由結婚の賛美、虚無党の崇拜、爆弾や拳銃、暗殺の手段など、社会に於ける小説の影響は、斯くの如くである。してみれば、わが国に於ける今日の文明は、小説の文明と言っていい。また、日本の政界、学界、教育界、実業界と異なるわが国の文明も、即ち今日の小説界の文明と言えなくもないだろう。⑫

この「発刊詞」の中で、小説は文明の一形式であると捉えられ、最も重要なのは、小説の役割が交通の手段として認識されたことである。このように、交通手段としての小説が社会生活にまで浸

透しつつ、小説の視野が確実に拡大され、ある意味では清末民初に於ける小説観の一端を物語っている。世紀末ながらも世界に向けて扉を開けた清末の上海では、翻訳された外国小説の中で、政治小説、世情小説、探偵小説、科学小説などといった主な種類が殆ど登場した。その中で探偵小説は他の種類より遥かに多く、上海の雑誌編集者は、何よりも伝統的な小説の筋を楽しむ中国人読者をよく知っていたからである。困みに、一九〇〇年の上海の人口は、既に六〇万人ものに達し、一九二〇年代になると、百二十万人ものものにぼっている。清末期の上海は、中国のどこよりも時代の最先端を歩み、メディアを中心とした商業都市の国際的地位を確実に高めたのである。『上海近代文学史』の中で次のように述べられている。

一九〇〇年以降、上海はわが国の近代小説の大本営となった。全国の八十パーセントの文学雑誌が上海に集中した。近代小説の作品集や翻訳文学の作品に関して調べられるものは、殆ど上海で刊行されている。しかも上海は、近代文学思潮の主な発祥地でもあった。一九〇二年の端に始まった政治小説の思潮、譴責小説(勸善懲悪)の小説ブーム、そして民国初頭に於ける世情小説のブームもすべて上海から全国に波及し、当時の文壇に大きな影響を与えたのである。〔…〕いくつかの思潮や作品は、瞬く間に消えてしまうものもあれば、三十、四十年代まで影響し続けていたものもある。近代上海の文壇には様々な文学思潮が生まれ、粗雑なものも混じっていたが、中国の近代小説の発展に道を切り拓いてくれたのである。上海が近代小説の実験場所となったのは、文学上において各種の文学思潮を包容することができ、当時の新潮作家たちに何よりも創作や発表の条件を提供してくれたからである。ここに、海外文学の輸入が決定的な起爆剤の作用となり、そして翻訳作品により、わが国の伝統小説は、海外の文学と比較することが可能になったのである。かくして、自閉的な文化圏から脱皮できるようになった。^⑭

以上を見るに、清末期に於ける新小説の誕生は、必ずしも伝統文人の書齋から生まれたのではなく、

そのような狭い範囲を超えて、我々の想像以上に新聞メディアの伝播、翻訳の媒体などと密接なつながりを持ったことが読者の目を楽しませてくれる。政治小説にせよ世情小説にせよ、清末の新小説と新聞メディアの誕生は、いわば双生児のように切っても切れない関係にあったと頷くだろう。中国小説史の研究者の中で、新小説の第一段階(一八九七～一九〇六)では、理論的には小説の社会的役割と小説界の革命の必要性が提唱されたと指摘されているものがある^⑮が、上述のことから見ると、新小説のジャンルは、もっと広がりを持っていたと考えられる。確かに小説理論としては、あまり新味が見られず、専ら社会的、政治的効用が強調されたきらいがあるが、新小説としてのジャンルは、小説の多様性を見せてくれた。無論、古典小説の影響からは完全に脱皮したとはいえないが、新小説の発展は通俗小説として、かなりのスピードで清末期の上海に定着していったようである。

結びに代えて

清末における新小説の繁栄は空前であった。その数や種類の多さだけでなく、内容的にも擬古小説や世情小説、諷刺小説などの他に、日本や西洋から輸入された政治小説や探偵小説、SF小説なども現れた。中国伝統文化のなかで、「詩以言志」、「文以載道」という観念が何よりも重んじられ、小説の地位は比喩物にならぬ程卑小だったが、清末において新小説の台頭により、小説に対する固定的観念がかなり変えられたと思われる。

ところで、二十世紀初頭の清末民初にはもう一つ注目すべき文学現象があり、すなわち、「鴛鴦蝴蝶派」(以下、「鴛鴦派」と略称。)と呼ばれた非常に活発な通俗文学の流派があった。「鴛鴦派」の名称については、様々な説があるが、この流派は、雑誌や小新聞と密接な関係があったのである。代表的な雑誌は、『小説時報』(一九〇九)、『小説月報』(一九一〇)、『遊戯雑誌』(一九一三)、『禮拜六』(一九一四)、『小説叢報』(一九一四)、『眉語』(一九〇四)、『中華小説界』(一九一四)、『小説大観』(一九一五)といった雑誌群がある。中では、『禮拜六』(「禮拜六」とは週末を指すこと。)が最も代表的な雑誌であった。二十世紀の

中国新文学が誕生する前夜に現れた鴛鴦派の文学は、消閑性、娯楽性、および趣味性を重んじる傾向があったが、世紀の変わり目に「人間の文学」を掲げた新文学の理論とのせめぎ合いの中で熾烈な論争が展開し、時代の変遷の中で徐々に歴史の舞台から退かれざるを得ないという運命を辿っていく。これらについては別稿で論ずるつもりである。

注

- ① 魯迅『中国小説史略』、『魯迅全集』(11巻)に所収、学習研究社、昭和六一年)
- ② 『晚清文学史』参照、阿英著、東方出版社、一九九六年
- ③ 中国国内では、これまで新文学運動以降の文学研究に重点が置かれ、既刊雑誌の資料編纂もその方針が窺われる。例えば、『中国現代文学期刊日録汇编(上・下)』(総ページ数:3701ページ。天津人民出版社、一九八八年)では、一九一五年五月に刊行された『青年雑誌』以降のものしか収録されていない。
- ④ 陳平原『『二十世紀中国小説理論資料』前言』、『二十世紀中国小説理論資料(1897-1916)』第一巻、陳平原・夏曉虹編、北京大学出版社、一九八九年)のなかで、新小説発展の三段階が提起されている。尚、清末民初の文学については、改良文学の段階(1894-1905)、共和革命文学の段階(1906-1915)という説もある(『現代中国文学史』、周曉明・王又平編、湖北教育出版社、二〇〇四年)。
- ⑤ 『点石齋画報』にみる明治日本』を参照、石曉軍編著、東方書店、二〇〇四年
- ⑥ 任公『蒙学报、演義報合叙』一八九七年一月五日、『時務報』44冊、一八九七年
- ⑦ 嚴復・夏曾佑『本館附印説部緣起』、『国聞報』光緒二十三年(一八九七)一〇月(『嚴復研究資料』に所収、海峽文芸出版社、一九九〇年)アヘン戦争後、清政府の進める「富国強兵」の政策で、1877年、嚴復は海軍を学ぶため、イギリスへ留学派遣。一八七九年、三年間の留学を終えた後、嚴復は福州船政学堂の教官を任命、一年後に天津北洋水師学堂の教官を任命される。天津北洋水師学堂の教務長、副校長、校長を歴任。ハーバート・スペンサーの『社会学』、J・S・ハミルの『自由論』、モンテスキューの『法の精神』などの翻訳がある。当時、上海の『時務報』、天津の『国聞報』は、維新変法を鼓吹する二大新聞として知られていた。
- ⑧ 『中国近代小報史』、孟兆臣著、社会科学文献出版社、二〇〇五年
- ⑨ 任公『訳印政治小説序』、『清議報』第一冊(一八九八年二月)に初出、『二十世紀中国小説理論資料(1897-1916)』第一巻に所収、陳平原・夏曉虹編、北京大学出版社、1989年
- ⑩ 任公『飲氷室自由書(一則)』、『清議報』第三十六冊に初出、1899年、『二十世紀中国小説理論資料(1897-1916)』第一巻に所収、陳平原・夏曉虹編、北京大学出版社、一九八九年
- ⑪ 梁啓超『小説と政治との関係について』(『新小説』第一巻第一期、増田渉訳)、『中国現代文学選集』(第一巻、

- 清末・五四前夜集)、増田渉編、平凡社、昭和三八年
- ⑫ 『覚世与傳世 梁啓超の文学道路』(夏曉虹著、中華書局、二〇〇六年)、『中国近代大衆傳媒與中国近代文学』(蔣曉麗著、巴蜀書社、二〇〇五年)を参照。
 - ⑬ 清末民初に文明思想を摂取するため、文学の役割は、即ち政治を改良して国民を啓蒙させ、社会的現実を反映するものでなければならないと考える梁啓超により、「小説界の革命」、「詩界革命」、「文界革命」(文界とは、文体を指すもの)が相次いで提起された。それに基づいて、梁啓超の文章にも「新小説」、「新名詞」、「新文体」、ないし「新境地」、「新事物」などといった言葉がどんどん使われ、二十世紀初頭に中国語の白話運動に一定の影響を及ぼしたことは無視できないものである。なぜなら、この期に於ける文学改良の運動は、即ち政治、社会、国民の改良運動だったからである。従って小説は、当時において最も重要視されたメディア言説の一つであった。ところが、晩年の梁啓超は、個人的嗜好により、俗小説に対してそれほど興味を示さず、専ら雅の詩文に関心を注いだ。中国文学に於ける雅と俗の問題は複雑であり、時代の変容があったからといって、文人観念のなかで簡単には統一できるわけではない。言い換えれば、中国の伝統的な文人としては、文学の価値は詩文にあり、その功利性は小説にあると言っても過言ではないだろう。
 - ⑭ 『覚世与傳世——梁啓超の文学道路』、210ページ、夏曉虹著、中華書局、二〇〇六年
 - ⑮ 王璜『與『儒林外史』有連續性的三部小説』、『東方雜誌』第42巻第5号に初出、一九四六年三月一日、『中国近代文学論文集・小説巻』に所収、中国社会科学出版社、一九八八年
 - ⑯ 注①に同じ。
 - ⑰ 吳沃堯『月月小説』序』、『月月小説』第一期に初出、一九〇六年六月、『二十世紀中国小説理論資料(1897-1916)』第一巻に所収、陳平原・夏曉虹編、北京大学出版社、一九八九年
 - ⑱ 黃人『小説林發刊詞』、『南社』(十一集)に初出、『中国近代文論選』(下巻)、人民文学出版社、一九八一年
 - ⑲ 『上海近代文学史』、陳伯海・袁進・主編、上海人民出版社、一九九三年
 - ⑳ 陳平原『『二十世紀中国小説理論資料』前言』、『二十世紀中国小説理論資料(1897-1916)』第一巻、陳平原・夏曉虹編、北京大学出版社、一九八九年

参考文献

- 『晚清小説史』、阿英著、人民文学出版社、一九八〇年
 『小説閑談四種』、阿英著、上海古籍出版社、一九八五年
 『上海新聞史』(1850-1949)、馬光仁編、復旦大学出版社、一九九六年
 『传媒与現代文学之間』、周海波・楊慶東著、中国社会科学出版社、二〇〇四年
 『中国近代大衆傳媒與中国近代文学』、蔣曉麗著、巴蜀書社、二〇〇五年
 『中国現代小説の起点——清末民初小説研究』、陳平原著、北京大学出版社、二〇〇五年
 『晚清時期小説觀念之轉變』、黃錦珠著、国立編譯館主編、台北文史哲出版社、民国八四年(一九九五)